

# 目をこらして (21)



何をして空振りだった。どうしたらいいか、分からなかった。子どもたちの心が、ささくれだっているように思った。遊びもよく分からず、言葉も行動も荒々しく感じて、子どもたちがかわいいと思えなかった。

初めての産休育休を終え、年少組の途中から担任した学級で、私は戸惑っていた。私が戸惑っていたのと同じように子どもたちも戸惑っていたのだろうけれど、そのことに気付く余裕もなかった。

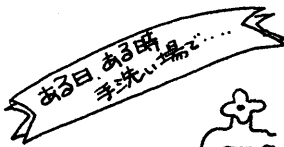
幼稚園が大好きで、子どもが大好きでこの仕事を選んだ。それなのに子どもという時間が苦しい。何もできず何も分からず、もうダメだと思った。

そんなある日、水道の蛇口に風船をつけ水を入れて遊んでいる子どもたちがいた。私はただそこを通り過ぎようとした。その時「きれいだねえ。すごいすごい！」とその子どもたちの遊びを感心して見ている日先生の声が聞こえた。

えっ? と思った。

立ち止まってみつめた。

水が風船の中に入る、ゆっくり入る。



そして...



・く〜んく〜んく〜んく〜ん  
大きくなる。玉!

・じゅ〜んは 風船が  
をっけ?... 水を出すと。



# 耳をすまして

光を受けて、小さいけれど丸くて重い美しい玉ができる。  
風船がはずれ水が飛び散る。

水しぶきを受けながら、もう一回！ と風船を蛇口につける子どもたちの無邪気な笑顔を見ていて、突然私の中になつかしさが満ちてきた。その時気付いた。子どもたちの遊びは、私のすぐそばにあったのだということに。

子どもが夢中になっていること、子どもがやりたいと思っていること、子どもが今まきに行っているそのことに目を向け耳を傾け共に喜ぶことを、私はすっかり忘れていたのだと気付いた。

保育が終わって園内研究の講師として来ていてくれたH先生にそのことを話すと「私はただね、子どもたちが面白いことをしているなあと思ったのよ。いい子たちだなあと思って思ったのよ」という言葉が返ってきた。あたたかい先生の一言が、今も私の中に響いている。

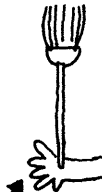
新しい年、こうして子どもたちと共に過ごす幸せをかみしめながら、ゆっくり歩いていこう。

絵と文 宮里暁美 (目黒区立ふどう幼稚園)

暑い日に園庭でサッカーをしている子たちに  
みみずをまいた。おどくよこはれた。



子どもたちと  
また  
一緒に笑いあえる  
ようになつて...



片付けの代わりに、ほみきを  
たて、パタパタと「あ〜と〜」  
と妙にもりあがって... 笑った。